戦時同志社史再考 ―運営体制の分析から―

田　中　智　子

はじめに

本論考の課題は、史料的観点から駒込論考の補完を図ることである。

とはいえ筆者は、戦時期を研究対象としてきたわけではない。19世紀後半の日本におけるキリスト教勢力（主に「同志社、アメリカン・ボード、新島襄」）の教育活動、ないしは官立学校の設立過程を、「地域史」をキーワードに捉え直してきた。この論考は、そこで培った視角ひいては史料収集方法が、1930年代同志社史の研究にどこまで応用できるのかという試みでもある。

Ⅰ　『同志社百年史』資料編の特徴

1979（昭和54）年刊の『同志社百年史』は、今なお同志社研究の基礎的テキストといえよう。まずはその資料編を広げてみたい。

同志社史の「花」と認識されているのは、やはり新島襄存命中の創設期である。細目は省いたが、「第一　開業関係」「第二　明治初期の同志社・諸学校」「第三　新島襄の遺言」には約180点（収録全点数349、ゆえに半数を超える）の史料が収められ、分量も総頁数の約６割を占めている。期間にして約15年、100年の1/6程度の歴史に対し、破格の待遇である。

次に構成上の特徴であるが、①管理運営に関わる規則類や報告書類といった基礎史料を、通時的あるいは系列校・団体単位で収録した章に混じり、②テーマ編

成された章が散見する。戦時期は②のなかのひとつ、「第十九　戦時下の学園」で扱われ、なかなか手に入りにくいレベルの史料をも含めて構成されている。

だが、戦時関係史料を求め、あらためて本書をひもとくとき、①のタイプに属する章のなかに、昭和10年代の史料がごっそりと抜けている章があることに気付く。

「戦時下の学園」と称する章を設け、戦時同志社史に一種の特別待遇を与え、大事に扱ったことは事実であろうが、逆に基礎史料が収録されていないというパラドックスが生じている。第十四・十五章の女子校関係、第二十二章「財政」などもそうであるが、もっともわかりやすいのが、年度ごとの「報告」類を収めた第四章であり、昭和５年度から25年度が空白期となっている。（なお本書末尾には唐突に、「一九七五年事業報告」のみから構成される第二十三章があらわれるが、これは、「同志社開業百年目の現状を把握するために収載」〔巻末解説：杉井六郎〕したものとされている）。

Ⅱ　「事業報告書」の歴史的位置

1936（昭和11）年11月５日の文部省令第19号により、「文部大臣ノ主管ニ属スル法人ノ設立及監督ニ関スル規程」（1899年８月26日文部省令第39号）が改正された。これにより同志社は毎年度、財産目録や賃借対照表を付して、「事業ノ情況」「庶務ノ概要」「収支決算書」「財産増減ノ事由」「社員ノ異動状況」を文部大臣に報告することを義務付けられた。財産目録と社員の員数のみでよかった報告義務内容が拡大したことになる。これを受けて作成が開始されたのが、いわゆる「事業報告書」であり、法人としての公的な事業記録にあたる。主たる事務所所在地の地方長官がその提出を受け、意見を付し、民法に反する行為などを文部省に報告する義務を負った。よって、昭和11年度分（1936年）にはじまる同志社の「事業報告書」は必ず京都府を経由する。現在、「事業報告書」は京都府総合資料館に（一

部所在不明)、原本控が同志社社史資料センターに所蔵されており、戦前については昭和18年度分までの内容が判明している。

同志社の「事業報告書」中、「庶務ノ概要」は、「役員ニ関スル事項」「職員ニ関スル事項」「役員会ニ関スル事項」から構成される。目を引くのは、役員一覧にそれぞれの略歴が記されていることと、「理事会」「評議員会」「幹事会」「財務部会」の各役員会について、会議事項と会議結果を一覧できることである。

同志社大学人文科学研究所は2006年、『同志社理事会記録　摘録』（１）（２）を刊行し、1904年から1955年までの理事会諸記録の翻刻を行った（第15期第１研究「同志社社史資料の研究」、代表：伊藤彌彦)。原本を参照するための「便覧」であり、「摘録」に過ぎないと位置づけられているが、膨大な理事会資料へのガイドとして利用価値が高い。しかし、さらにその前段階の基礎ガイドとされるべきなのが、「事業報告書」の会議記録であり、従来の活用頻度の低さが不思議なぐらいである。

Ⅲ　理事・評議員の構成

まずは「事業報告書」に記された役員略歴を整理して、同志社運営体制の特性を考えよう。いいかえれば、駒込論考における「オエラ方」とはどのような人物だったのかを明らかにする作業でもある。同時代を過ごした関係者にとっては自明の事柄であったため、あるいは「身内」のことでもあり、かつては俎上に乗ることが少なかった問題かもしれない。

1925（大正14）年１月、同志社では改正寄付行為を施行し、「評議員会」が設置された。評議員会は理事選出母体であり、「校友同窓社友」計50名から成る組織である。「校友」とは同志社ＯＢ、「同窓」とは同志社女学校ＯＧ（こちらを合わせて「校友」が広義に用いられることもある)、「社友」とは、寄附者や寄附団体の代表者、理事・監事であった者、功労者から成る。この改正は、「校友の母

校への協力の途を制度的に拡大」（同志社々史々料編集所編『同志社九十年小史』、1965年）したとされる変更であった。理事は20名から減少して12名となり、１名を総長、３名を理事会、８名を評議員が選ぶこととなった。

1933（昭和８）年、理事数に手が加えられ、12名から20名へと再び増員、そのうち７名が常務理事となった。理事20名のうち７名は理事会、１名は総長、12名は評議員（内訳：５名＝校友、３名＝同窓、２名＝社友、２名＝一般）が選ぶこととなった。この増員については、「同志社の強化には校友その他一般財界の篤志家を一人でも多く理事に包含する必要に迫られての改正」（同上）と評されている。また1937年５月には、理事が25名に増員され、職員選出理事５名が加わった。

さしあたり、1936 ～ 39年度の事業報告書から判明する理事会・評議員会（総計89名）の構成を表に示した。年齢構成の点からみると、1860年代以前生まれ（70代以上）：12名、1870年代生まれ（60代）：25名、1880年代生まれ（50代）：22名、1890年代生まれ（40代）：19名、1900年代生まれ（30代）：10名、1910年代生まれ（20代）：１名、となる。男女比は約6.5：１であり、外国（アメリカ）人は６名、同志社系列校同窓生は82％に上る。

これらの人物を一元的に分別することは難しく、学者・教育者・キリスト者・ジャーナリスト、それら複数の属性を有する人物等々、さまざまな経歴が入り組んでいる。駒込論考は、『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』には、同志社攻撃勢力に対する婉曲な批判記事が時折含まれると指摘するが、両紙の関係者も評議員である（一覧表No. ３、62、64）。また駒込論考が注目する「財界人」と呼べるであろう人物には＊を付した。

Ⅳ　学園を動かすのは誰か

駒込論考が具体的に取り上げたのが、1935（昭和10）年６月の「神棚事件」において、湯浅総長・上谷理事とともに第16師団を訪れ、事態の解決を図った大澤

徳太郎常務理事（No.18）である。前掲『同志社理事会記録　摘録』（１）を通読すると、多方面での彼の活躍ぶりを印象づけられる。1937年６月19日、関西学院大学で開催された全国私立大学連合会第12回総会において、教練に関する非公式懇談会中、学校配属将校に対する失言問題が発生し、懇談会の提案者である同志社の浅野恵二庶務部長が自ら辞職するという事件が起こった。このとき、常務理事会の名で師団関係に了解を求め、円満解決を図るために総長と奔走したのも大澤理事だという。またこの手の問題に限らず、1936年９月、川崎信託株式会社に委託した昭和10年度会計監査手数料が「大澤理事の配慮で」（前掲『同志社理事会記録　摘録』からの引用。理事会については以下同じ）減額されるといった些細な出来事にも、財力や人脈を背景とした発言力の大きさがうかがわれる。

理事会・評議員会における大澤家の力は、徳太郎にとどまらない。そもそも大澤家は、先代善助以来の（同志社的に）由緒正しき家柄であるが、徳太郎の妻で同窓会副会長の武間富貴（No.51）、長く大沢商会に勤めた村田竹治郎（No.27）も、名を連ねている。同志社関係者は、個人にとどまらず家族的な広がりを有する傾向が強く、四代を誇る「同志社ホーム」の代表格・「大澤一族」には（後述『我等の同志社』の特集参照）、強い影響力が存したことをみてとれる。

今ひとり、駒込論考において注目されたのが、「上申書」事件で暗躍した三井物産取締役・小林正直（No. ５）である。これに先立つ1936年４月、小林は「国体明徴論文掲載拒否事件」に際しても、軍の中島今朝吾と会談し、緊急理事会を開いて事態を解決した。また小林は大澤とともに、三井信託からの「岩倉土地借入金利息」を代払いしているが（1936年11月）、要するに岩倉校地購入に際しての金策の立役者でもあり、同志社の経営面における支えとなっていたといえる。1938年になると、評議員にはあらたな「財界人」が矢継ぎばやに登用されており、人事傾向の変化をみてとることができるが、それまでの同志社の運営には、地元の大澤、中央の小林という60代東西財界人の意向と行動が強く作用していたと考えられるのである。

一方で、別の人材登用法も確認される。上記「国体明徴論文掲載拒否事件」においては、小林と中島今朝吾との会談に先立ち、1936年４月10日、「社友吉田悦蔵、生徒父兄山下彬麿が昵懇の中島今朝吾司令官に相談」したことが、解決の糸口となった。直後の４月19日には山下彬麿が「法律顧問」に、5月30日には吉田が理事会選出理事に選出されている。吉田は近江兄弟社女学校長であり、山下は歌謡界でも知られた東京帝大法科卒の弁護士であったが、いわば事態の解決に功績のあった人物が、すぐさま運営陣に加えられていったのではないかと推測される。

付言にとどまるが、軍との関係についても指摘しておく。

1937年７月のチャペル籠城事件で学生を煽動した草川靖中佐は、津の連隊に飛ばされたが、数年を経て再び京都に舞い戻り、今度は第三高等学校の配属将校となった。1942年１月、第三高等学校において、草川大佐の横暴に耐えかねた一生徒が、彼を銃で殴るという「配属将校殴打事件」が起きた。これは、反軍的という意味における三高の「リベラリズム」を象徴する事件として叙述されてきたが、重要なのは事後処理の方法であろう。三高では、校長と師団長が会談して事態の収拾が図られ、草川左遷・生徒放校という痛み分けの処分で落ち着いた。同志社で同様の事件が起こったならば、このような解決をみることはありえないどころか、学校の存廃問題に発展したであろう。「つぶされない」官立と私学との違いをあらためて感じるとともに、官立旧制高校の「リベラル」さは、「つぶされない」安心感の上に成り立ち得たのではないかとの仮説が生じる。

1940年代の三高に対し、1930年代の同志社の場合は、「神棚事件」を例にとると、総長―師団長会談を経た後、特定の個人（吉田・山下・小林）が間に入ることで、軍人個人（中島）とつながり、調停役を務めてもらうかたちとなった。やがて、「個人の資格で」事態解決の調停役を果たした前歴をもつ中島今朝吾に対し、理事会が「最近学内事情並に対官辺関係に付き報告」するようになる（1939年５月）。軍人中島の力を頼りに運営を行うことが学園として公認されるという、組織―個人の恒常的関係が構築されるにいたったと捉えられる。

まとめにかえて

1935（昭和10）年10月は同志社創立60年記念の年に相当していた。学内では、大がかりな記念行事が催され、ラジオ中継まで企画された。東久邇宮稔彦列席の祝賀式、徳富蘇峰・安部磯雄・海老名弾正による連続講演会、演奏会……、そして当初は、基督教教育同盟総会の同時開催も予定されていた。この一大イベントの一環として同志社事業部より刊行されたのが、「同志社校友同窓会報」第100号特集『我等の同志社』である。

文部大臣以下、伯爵、東京・京都帝大総長、早稲田総長・慶応塾長・立教学長、府知事・第16師団司令官・市長、大阪毎日・朝日新聞社長らの祝辞が並び、新島襄や蘇峰・蘆花兄弟をはじめとする関係著名人の特集、佐々木惣一・滝川幸辰・高田保馬の寄稿面があるかと思えば、配属将校の言も掲載される。学生スポーツ面もあれば、活躍する卒業生を分野別・網羅的に紹介した頁もある。「神棚事件」の後遺症も何のそのといった賑々しさ、てんこ盛りにされた多種多様な記事から構成された150頁ほどのグラフである。この『我等の同志社』こそが、1935年当時における同志社の思想状況の縮図だという印象を受ける。

以上、史料的な切り口から、1930年代同志社史を少しでも立体的にできれば、との趣旨により議論を組み立てた。同志社のキリスト教主義学園としての性格をふまえた場合、どのような史料が注目に値するかについては、末尾に付記として収録しておいた。そちらの内容もふまえ、最後に若干の考察を試みておく。

明治前期すなわち19世紀後半において、地域の高等教育実現体制は未確立であり、京都府知事（当局）や京都府会、あるいは中央の文部省までもが、キリスト教勢力としての性格を斟酌しつつ、私学同志社あるいは宣教師をどのように活用していくかを模索していた。府知事の裁量や地域有力者（時に府会議員）の動向は、事態の推移を決定づける重要な要素であった。その意味で、19世紀同志社史

は地域史、すなわち府県史として再構成し得た。

1930年代の同志社をめぐる力学は、「好ましからざるキリスト教」という、19世紀と共通する時代状況の下に展開するが、まったく違った様相をみせる。

府会議員にして同志社運営に関与する人物は確認できず、今のところ府知事の自主的・能動的関与も認められない。府県は特別高等警察課を通じて同志社を思想的に抑圧する立場で、ほぼ一貫しているといえそうである。市という行政主体もほぼ無関係である。

一方、中央との人脈を考慮しつつ、地元財界の意向と同志社経営との関連を探ることは、今後の検討課題となろう。「財界人」の理事・評議員のキリスト教入信率もはじきださねばならない。

そして、軍というあらたな主体の登場、文部省の政策、官立大学との人的・構造的関係、キリスト教界の戦略等々、戦時同志社をめぐるさまざまな主体の析出と相互関係の総合的考察が求められている。近代京都の歴史と銘打った書物のなかで、京大あるいは同志社がテーマとして扱われるケースが散見する。だがそのことだけをもって自動的に「京都史」になるとはいえない。たまたま京都に所在する学校の話をしているにとどまるだろう。同志社史にそくしていうなら、特に地元財界、第16師団や京都帝大との関係こそが、すぐれて地域（＝京都）的な問題として展開しているのであり、そこに「地域史」として戦時同志社史を描きうる可能性があるといえるのではなかろうか。

付記　――キリスト教主義学園としての同志社へのまなざし

官立学校と異なり、同志社が組織として「つぶされる」可能性におびえなくてはならない理由は、キリスト教主義の学校であることにこそ求められる。ここではそうした側面における「同志社包囲網」の実態を示す史料を一、二示しておきたい。

①文部省による調査

社史資料センター所蔵の『財団事業報告書　昭和十六年度』（昭和十五年の事業報告書）末尾には、同志社に文部省の調査が入ったことを示す書類が綴じ込まれている。1940（昭和15）年10月11 ～ 12日、文部省属水島末一･刈口春一により、経理関係の調査と並行して行われたらしい。

『キリスト教学校教育同盟百年史』（同編集委員会編、教文館、2012年）は、1939年に文部省によるキリスト教学校総合視察が行われたとし、「多くの学校史に記録が残っている訳ではないが、断片的にその様子をうかがうことができる」と述べて、明治学院･宮城女学校･成美学園･金城学院の視察状況を例示している。『同志社百年史』はこの視察に触れていないが、「事業報告書」に綴じ込まれた文部省属による調査がこれにあたるのではなかろうか。「同志社ニ関スル調査事項」と称するその調書は、『キリスト教学校教育同盟百年史』が参照した諸学校の実例以上の情報を伝えており、文部省の同志社観と同志社の実情、さらには文部省の視察そのものについての知見を与えてくれる。

「同志社ニ関スル調査事項」は、「沿革」「寄付行為及諸規程」「学則」「役員」「教職員」「学生生徒」「挙式」「教科書」「経済状態」「寄附金」「財産」「将来ノ計画」「其ノ他」から成り、各項中で、キリスト教がいかに取り入れられ浸透しているかが量られている。例えば、「比較的裕福ナルモノ多シ」とされる「学生生徒」については、「約十パーセント基督教徒ナリ」との報告がある。また末尾には、経歴や「内外人ト交際状況」などを記した、社内外国人教師12名（クラップ、カーブ、デントン、ジレット、ハケット、ホール、ヒバート、ルーミス、シャイベリー、ワーレン夫妻、ウダード――すべて表記原文ママ）の調書が綴じ込まれている。

②*Missionary Herald*と同志社

今日の19世紀同志社史研究において、「アメリカン・ボード宣教師文書」は自

明のごとく参照される基礎史料である。特に実証面での史料的価値が高いのは、個々の宣教師とボストン本部との間で取り交わされた日常的な書簡である。『百年史』の「花」（創設期）部分の叙述も、これらを用いた研究によってかなり乗り越えられてきた。

こうした研究に携わってきた者としては、1930年代に滞日したアメリカン・ボード宣教師の目に、同志社の状況はどのように映っていたのか、当該期同志社の研究にアメリカン・ボード宣教師文書を用いることはできないのだろうか、といった素朴な疑問に導かれる。ところが同志社大学人文科学研究所は、ハーバード大学所蔵の原文書のうち、1896年までの往復書簡のマイクロフィルムしか作成・所蔵できていない。同志社史、ひいては日本キリスト教史あるいは教育史上における宣教師の存在意義の大小に所以するとはいえ、19世紀史研究の方法を20世紀史研究に引き継ぎ生かす試みは、もっとあってよいように思う。ちなみに、イギリスで頒布されたアメリカン・ボード宣教師文書マイクロフィルム（同志社大学図書館所蔵）も、1919年までで区切られている。

往復書簡の収集は今後の課題となるが、アメリカン・ボードの公的な機関誌である*Missionary Herald*の1933年から1939年途中までの分については、欠号を含みつつも同志社大学神学部に所蔵されているので、とりあえずこちらを検討してみよう。神学部に所蔵されるそれは、研究用に収集された逐次刊行物ではなく、まさに大学当局の所蔵物であった来歴をもつ（なお、人文研に所蔵されるのは、神戸女学院の蔵書の複製であり、こちらは1940年まで所在がある。神学部の欠号を埋めようとした高道基（駒込論考参照）の仕事であることを物語るメモがある）。

いくつかの号の表紙にみられる“Kindly Return to Morikawa”との書き込みは、主事森川正雄（総長秘書兼外事係、1932年10月4日～在職）を指すと推察される。また、外国人のものと思われる筆跡で、“See p.〇〇”との赤鉛筆書き込みがある。このことからおそらく、社内のアメリカン・ボード宣教師宛に本国から定期的に送られた*Missionary Herald*が、森川に渡されていたものと推察される。さらに

森川は学内諸部局にこれを回覧したとみえ、総長・財務・庶務の押印欄が設けられている。

湯浅八郎総長は「神棚事件」後の1935年10月、組合教会総会において、「自分の生涯の仕事としてかゝつた自然科学の研究を捨てゝ同志社へ入ったのは神がこの仕事をなさしめんためである、同志社は日本の基督教教育界の約８分の１を占め、経常費７分の１を注いでゐる。この九百人の生徒をクリスチヤンにするかしないかは大問題である、創立当時よりして組合教会と連絡を保つて来たのであるから今後も益々教会と共に提携していきたい」との挨拶をなした（『日刊基督教新聞』1935年10月８日）。そうした湯浅は、*Missionary Herald* 毎号にしっかりと目を通していた痕跡がある。

Missionary Herald では、駒込論考で取り上げられたような同志社の事件が具体的に報じられたことはない。しかしD.W.Learnedによって創設以来の同志社史が、湯浅総長の顔写真入りで紹介されたこともあった（“Notable Facts Regarding Doshisha” 1936年１月号）。そして1936年８月号では、日本では学校・大学が疑惑の目でみられていることが伝えられるとともに、4,000人以上の生徒が在籍する同志社を、キリスト教の国際的連帯のために重要な戦略拠点と捉え、宣教師の減少によって学生たちとの接触が失われていくことを惜しむレポートがみられる。

すでに1935年段階で、京都府の特別高等警察課は、「欧米国人ノ大多数ハ宣教師学校教師其ノ他日本古美術ノ研究者ニシテ永年本邦ニ居住シ国情ニ通ジ居ル関係上本国ニ対シ我が国ニ不利ナル情報等ヲ為ス者ナキヲ保シ難ク鋭意視察中」（『昭和10年１月　斎藤前知事鈴木知事事務引継演説書』京都府立総合資料館所蔵）であり、1937年半ばには、神学部カーヴ教授宛私信が本人に渡る以前に特高の手に入るという状況であった（和田洋一の証言、『特高資料による戦時下のキリスト教運動』１、1972年所収）。*Missionary Herald*も、日中戦争がらみの記事等を掲載した1938年４月号が、日本政府によって没収されるようになる（同９月号記

事)。そして、1940年以降、同志社からも*Missionary Herald*が消え、1942年にはアメリカ人の理事・教員が消えるのである。

なお湯浅は同志社総長として過酷な諸事件を経験した後、アメリカにわたって各地で講演活動に勤しんだ。*Missionary Herald*は、同志社での彼の体験には触れることなく、顔写真付きでその姿を大きく報道したのであった（“A Japanese Christian in America” 1940年11月号)。

同志社理事・監事・評議員一覧表（1936 ～ 39 年度）

	氏名	就任年月日	辞任年月日	生年月	略歴（原文ママ）	備考
＜理事＞						
1	湯浅八郎	1935.4.1	1938.1.7	1890.4	群馬県出身、同志社普通学校及米国カンザス州農科大学卒業、元京都帝大農学部教授、第十代同志社総長、元同志社大学長、理学博士 Ph.d、京都市現住	
2	安東長義	1935.4.1	39	1888.5	鹿児島県出身、同志社大学（専門学校令準拠）神学部卒業、現薬石日報社専務取締役、大阪市現住	
3	橋本喜作	1935.4.20	39	明治3 (1870).2	大阪府出身、元大阪毎日新聞社社員、現浜寺土地及大阪港土地株式会社社長、大阪府現住	*
4	上谷　続	1934.4.1 1938.4.1		1873.4	兵庫県出身、同志社普通学校卒業、元日本船主協会専務理事、昭和４年国際労働総会日本使用者代表、現同志社財務部長、〔兼臨時総長事務取扱、事務嘱託〕、西宮市在住	
5	小林正直	1935.4.1	1937.7.28	1873.4	京都府出身、同志社普通学校卒業、元電気化学工業株式会社々長、現三井物産取締役、東京市現住	*
6	牧野虎次	1938.1.10 1938.4.1		明治4 (1871).7	滋賀県出身、同志社普通学校及エール大学卒業、〈元内務省嘱託満鉄社会課長〉、〔元臨時内務省事務取扱、元大阪府事務取扱、元日本組合基督教会総幹事〕、〈現東京家庭学校長、同志社大学文学部講師〉、〔同志社総長事務取扱兼大学長〕、東京市在住	
7	松田みち	1934.4.1	1939.2.18	明治1 (1868).9	京都府出身、京都高等女学校、横浜フェリス女学校及米国ブリンモール女子大学卒業、元神戸女学院教授、元同志社女子専門学校長、現同志社女子専門学校名誉教授、現同志社同窓会長、京都府現住	同窓会長

8	美濃部　菫	1935.4.1	39	1893.9	兵庫県出身、同志社普通学校・同志社大学（専門学校令準拠）経済科及米国コロンビア大学卒業、元神戸市秘書課長、現薬種商、大阪府現住	
9	三宅驥一	1928.3.9 1935.4.1	39	1876.11	兵庫県出身、同志社普通学校、同志社理科学校大学部、コーネル大学及ボン大学卒業、前東京大学農学部教授、理学博士 Ph.D. 東京市現住	
10	Sherwood Ford Moran	1935.4.20	39	1885.10	米国ケンタッキ州出身、オベリン大学・コロムビア大学及ユニオン神学校卒業、大正５年９月来朝、現アメリカンボード日本駐在宣教師、西宮市現住	
11	中村栄助	1911.12 1935.4.1	1938.9.17 逝去	嘉永2 (1849).3	京都府出身、初代衆議院議員、元京都府会議長及京都市会議長、元同志社総長事務取扱、京都市現住	*
12	中村久江	1934.4.1 1938.4.1		1874.6	大阪府出身、同志社女学校普通科卒業、現中山文化研究所理事、兵庫県現住	
13	西尾幸太郎	1935.4.20	1938.2.17	明治1 (1868).11	鳥取県出身、同志社神学校別科卒業、現日本組合基督教会伝道部長、同志社文学部講師、西宮市現住	
14	西崎綾野	1935.4.1	39	1880.2	岡山県出身、同志社女学校普通科卒業、現東京女子薬学専門学校長西崎弘太郎妻、東京市現住	
15	大石七郎	1934.6.5 1938.4.1		明治3 (1870).3	佐賀県出身、同志社普通学校卒業、〔三井物産船舶部長ヲ経テ〕現明治海運及三興商事株式会社取締役、神戸市現住	*
16	奥村龍三	1934.5.25 1938.4.1		1892.8	京都府出身、同志社普通学校及同志社大学（専門学校令準拠）経済科卒業、元神戸 Y.M.C.A. 総主事、現同志社創立六十周年記念臨時事業部長、京都市現住	
17	C.Burnell Olds	1935.4.1	39	明治5 (1872).3	米国ウヰスコンシン州出身、ベルロイト・ハート・フォード大学卒業、明治 36 年来朝、基督教伝道ニ従事、現日本組合基督教会理事、ミッション常務委員、岡山市現住	
18	大澤徳太郎	1923.4.1 1935.4.1 1939.4.4		1876.2	京都府出身、現大澤商会社長、貴族院議員、京都市現住	*
19	鈴木達治	1934.5.25	1938.3.31	明治4 (1871).9	愛媛県出身、同志社理科学校大学部及東京帝大理科大学卒業、元第二高等学校、広島高等師範学校及東京高等工業学校教授、前横浜高等工業学校長、横浜市現住	
20	吉田悦蔵	1937.6.29 1938.4.1		1890.3	滋賀県出身、滋賀県立八幡商業卒業、現近江基督教慈善教化財団理事、近江セールズ株式会社取締役、近江兄弟社女学校々長、滋賀県現住	

21	猿丸吉左衛門	1938.4.4		1903.2	兵庫県出身、同志社大学法学部卒業、現地主、矢満喜商事取締役、芦屋駅前郵便局長、兵庫県現住	*
22	後宮信太郎	1939.5.10		1873.6	京都府出身、同志社普通学校ニ学ビ後渡台四十年台湾総督府評議員、台湾商工会議附会頭ニ推サル現金井鉱山株式会社、台湾瓦斯株式会社社長、東京市現住	*
23	Harold W. Hachett	1939.4.14		1904.8	米国ノースフリードム出身、米国ベリア大学卒業、大正９年９月来朝、現日本組合宣教師社団財務主任、神戸女学院理事、西宮市現住	
24	秦　孝治郎	1939.5.10		1890.2	神奈川県出身〔滋賀県出身〕同志社普通学校及同志社大学経済科卒業、久原鑛業ニ入社、更ニ塩屋商店経営、現朝日スレート株式会社専務取締役、〔日本工材株式会社取締役社長、横浜英語学校々長〕	*
25	畠中　博	1939.4.14		1885.7	兵庫県出身、同志社普通学校ニ学ビ米国オベリン大学卒業、現神戸女学院副院長、西宮市現住	
26	松島寛三郎	1939.5.10		1875.4	大阪府出身、同志社普通学校ニ学ビ京都帝国大学〔理工科〕土木工学科卒業、現京阪電気鉄道株式会社常務取締役兼技師長、〔鞍馬電気鉄道株式会社監査役〕大阪府現住	*
27	村田竹治郎	1939.4.10		1886.11	奈良県出身、同志社普通学校卒業、大沢商会ニ多年在勤、現日本レース株式会社常務取締役、同志社校友会副会長、京都市現住	* 校友会副会長
28	富岡とし	1939.4.10		1879.9	和歌山県〔京都府〕出身、同志社女学校普通科及同志社女学校文科卒業、元京都帝国大学講師故富岡謙三妻、京都市現住	
29	若松兎三郎	1939.4.4		明治2(1869).1	大分県出身、同志社普通学校卒業、東京帝国大学法科〔政治科〕ニ学ブ、元領事、慶尚南道知事ニ歴任〔釜山府尹仁川取引所理事長ヲ経テ〕現同志社校友会長、京都府現住	校友会長
30	石川芳次郎	1939.4.1		1881.11	京都府出身、明治37年同志社普通学校卒業、京都帝大理工科電気工学科卒業、現京都電燈及愛宕山鉄道取締役、〔元〕同志社校友会長、京都市現住	* 校友会長
＜監事＞						
31	広岡久右衛門	1936.4.1 1939.4.24		1890.1	広島県出身、同志社普通学校及同志社大学（専門学校令準拠）経済科卒業、現大同生命保険株式会社副社長、大阪市現住	*
30	石川芳次郎	1931.7.13 1936.4.1	39		（理事の項に前出）	

32	大野英夫	1936.4.1 1939.4.24		1894.10	京都府出身、同志社大学（専門学校令準拠）経済科卒業、元京都府多額納税者、現太陽織布社長、兵庫県現住	*
33	田中一馬	1936.4.1 1937.4.1 1939.4.24		1877.1	京都府出身、東京高商卒業、現京都府多額納税者、亀岡銀行頭取、京都取引所理事、京都市現住	*
34	塚本純一	1939.4.25		1892.8	京都府出身、同志社大学経済科卒業、現日本電池株式会社在勤、京都市現住	
＜評議員＞						
2	安東長義	1934.4.1	（理事の項に前出）			
35	浅野恵二	1926.4.1 1934.4.1	38	1888.11	岡山県出身、同志社普通学校、同志社大学（専門学校令準拠）経済科及京都帝大経済学部卒業、元日本銀行員、大阪市史編纂ニ従事、前同志社学務部長、現同志社専門学校法理経済学講師、京都市現住	
36	足利武千代	1926.4.1 1934.4.1	38	明治3 (1870).6	京都府出身、同志社普通学校及同志社政法学校卒業、元足利銀行支配人、元同志社庶務部長、現カナダサン生命保険株式会社勤務、京都市現住	*
37	波多野培根	1926.4.1 1934.4.1 1938.4.1		1868.6	島根県出身、同志社普通学校卒業、元同志社普通学校教頭、現西南学院高等部教授、福岡市現住	
38	日野真澄	1934.4.1 1938.4.1		1874.1	山形県出身、同志社普通学校、同志社神学校、米国ユニオン神学部及コロムビア大学卒業、前同志社大学予科長、現同志社大学文学部教授、京都市現住	
39	片桐　哲	1934.4.1 1938.4.1		1888.3	宮城県出身、同志社普通学校、同志社大学神学部及米国ハートフォード神学校卒業、現同志社女子専門学校長、同志社高等女学部校長、京都市現住	
40	河原政勝	1934.4.1	37	1892.8	青森県出身、同志社大学（専門学校令準拠）政治科及米国コロムビア大学卒業、現同志社大学法学部教授、神戸市現住	
41	黒川芳蔵	1930.4.1 1934.4.1 1938.4.1		1891.3	京都府出身、同志社普通学校及同志社大学（専門学校令準拠）経済科卒業、現同志社高等商業学校教授、〔同志社大学法・経済学部教授兼部長〕、京都市現住	
6	牧野虎次	1926.4.1 1934.4.1 1938.4.1	（理事の項に前出）			
42	松尾音治郎	1934.4.1	38	元治1 (1864).2	兵庫県出身、同志社英学校、同志社神学校及エール大学卒業、元京都商工会議所理事、現同志社高等商業学校講師、京都市現住	*

8	美濃部　堇	1934.4.1 1938.10.1		（理事の項に前出）		
43	三輪源造	1926.4.1 1934.4.1	38	明治4 (1871).8	新潟県出身、同志社普通学校及同志社神学校卒業、現同志社女子専門学校講師、京都市現住	
9	三宅驥一	1926.4.1 1934.4.1 1938.4.1		（理事の項に前出）		
44	中瀬古六郎	1926.4.1 1934.4.1 1938.4.1		明治2 (1869).12	奈良県出身、同志社英学校及米国ジョンス・ホプキンス大学卒業、現同志社大学予科教授、〈第三高等学校〉及同志社高商講師、理学博士 Ph.D、京都市現住	
45	中塚種夫	1934.4.1 1938.4.1		1897.8	大阪府出身、同志社大学（専門学校令準拠）経済科卒業、元大阪府会議員、現協調会勤務、東京市現住	
13	西尾幸太郎	1930.4.1 1934.4.1	（理事の項に前出）			
46	大塚節治	1926.4.1 1930.4.1 1934.4.1	38	1887.3	広島県出身、同志社普通学校、同志社神学校及米国ユニオン神学校卒業、現同志社大学文学部教授及文学部長、京都市現住	
18	大澤徳太郎	1930.4.1 1934.4.1 1938.4.1	（理事の項に前出）			
21	猿丸吉左衛門	1934.4.1 1938.4.1	（理事の項に前出）			
47	瀬川次郎	1934.4.1	38	1894.8	京都府出身、同志社大学（専門学校令準拠）経済科及京都帝大経済学部卒業、元同志社大学法学部教授、京都市現住	
48	露口四郎	1934.4.1	38	1896.12	大阪府出身、同志社大学（専門学校令準拠）経済科卒業、現株式会社大丸秘書課長及外国貿易商露口商店経営、大阪市現住	*
49	鷲尾健治	1934.4.1	1937.8.9 逝去	1880.1	新潟県出身、京都帝大法科大学卒業、元山口高等商業学校長、現同志社高等商業学校長、京都府現住	
50	山本美越乃	1926.4.1 1934.4.1 1938.4.1		1874.1	三重県出身、同志社高等普通学校卒業、ウィスコンシン大学、ロンドン及ベルリン各大学ニ学ブ　元京都帝国大学経済学部教授、同志社大学法学部講師、現京都帝国大学名誉教授、法学博士、京都市現住	
1	湯浅八郎	1934.4.1	（理事の項に前出）			

51	武間富貴	1930.4.1 1934.4.1 1938.4.1		1889.3	京都府出身、同志社女学校専門学部英文科卒業、現同志社同窓会副会長、現大澤商会常務取締役武間享一妻、京都市現住	同窓会副会長
52	Mary Florence Denton	1926.4.1 1934.4.1 1938.4.1		安政6 (1859).7	米国カリフォルニア州出身、北米ミス・ポータンス専修学校卒業、明治 21 年来朝、現同志社女子専門学校教授 D.E.、京都市現住	
53	八馬　廣子	1934.4.1	38	1901.3	奈良県出身、同志社女学校普通学部及同志社女学校専門学部英文科卒業、現八馬汽船社長八馬安二良妻、兵庫県現住	
54	堀内　義	1934.4.1	38	1877.11	山形県出身、同志社女学校及米国エール大学音楽科卒業、現同志社校友会副会長歯科医師堀内清母、東京市現住	
55	星名ヒサ	1934.4.1 1938.4.1		1874.6	愛媛県出身、同志社女学校普通科卒業、満鉄社員秦母、元同志社女子専門学校〈教授〉〔講師〕、京都市現住	
56	加藤さだ	1934.4.1	38	1904.4	三重県出身、同志社女子専門学校英文科及同志社大学文学部卒業、現同志社女子専門学校教授、現同志社高女教諭加藤龍太郎妻、京都市現住	
57	佐伯外浪	1934.4.1 1938.4.1		1871	長野県出身、同志社女学校本科卒業、元東京女子高等師範学校教授、現東京文化学院研究員佐伯好郎妻、東京市現住	
58	田邊繁子	1934.4.1 1938.4.1		1906.6	京都府出身、同志社女学校専門学部英文科及同志社大学法学部卒業、元同志社女専講師、現東京工業大学教授田邊平学妻、東京市現住	
59	Edward Scribner Cobb	1930.4.1 1934.5.7 1938.9.10		1878.8	米国マサチユセツツ州出身、ユニオン神学校及アーモスト大学卒業、明治 37 年来朝、現同志社大学文学部教授、京都市現住	
60	大原孫三郎	1930.4.1 1934.5.9 1939.1.7		1880.7	岡山県出身、現岡山県多額納税者、倉敷紡績社長、中国銀行頭取、倉敷市現住	*
61	William Merrell Vories	1934.5.30	38	1880.10	米国カンサス州出身、コロラド大学卒業、現近江セールズ株式会社々長、近江兄弟社創始者 LL.D. 滋賀県現住	
62	阿部賢一	1934.5.8	38	1890.8	徳島県出身、同志社普通学校及早稲田大学卒業、現早稲田大学教授、大阪毎日新聞社経済部長、経済学博士、東京市現住	
63	深井英五	1926.4.1 1934.5.6	38	1871.9	群馬県出身、同志社普通学校卒業、元日本銀行頭取、現衆議院議員、東京市現住	*
64	濱田光雄	1934.5.5	38	1893.1	大阪府出身、同志社普通学校及同志社大学（専門学校令準拠）神学科卒業、現大阪朝日新聞社社会事業団主事、京都市在住	

65	水崎基一	1934.5.6	1937.11.29 逝去	1871.9	長野県出身、同志社普通学校及英国エヂンバラ大学卒業、元同志社理事、同大学長、現浅野総合中学校長、横浜市現住	
66	森松貞次郎	1930.4.1 1934.5.7	38	1881.7	愛媛県出身、同志社普通学校、同志社専門学校経済科及米国シカゴ大学卒業、現帝国紡績株式会社常務取締役、名古屋市現住	*
32	大野英夫	1934.5.9	38	（監事の項に前出）		
28	富岡とし	1934.5.24	（理事の項に前出）			
67	山本藤助	1934.5.8	38	1906.12	大阪府出身、同志社大学法学部卒業、現山本汽船株式会社々長	*
30	石川芳次郎	1926.6.1 1934.4.1	（監事の項に前出）			
7	松田みち	1933.4.16 1934.4.1	（理事の項に前出）			
68	有賀鐵太郎	1938.4.1		1899.4	京都府出身、同志社大学卒業、シカゴ大学神学部、ユニオン神学校、コロムビア大学ニ学ブ、現同志社大学文学部教授、D.D、京都市現住	
69	遠藤作衛	1938.4.1		1889.1	福島県出身、同志社神学校ニ学ビ、オベリン大学神学部大学院卒業、現洛陽教会牧師、同志社高等女学部嘱託教員、京都市現住	
24	秦　孝治郎	1938.4.1	（理事の項に前出）			
70	速水藤助	1938.4.1		1881.3	京都府出身、同志社普通学校、同志社専門学校、同志社神学校及北米パシフィック神学校卒業、現同志社大学予科教授、京都市現住	
71	林　信雄	1934.4.1 1938.4.1		1905.3	兵庫県出身、同志社専門学校高等商業部及同志社大学法学部卒業、元同志社大学助教授、現東京巣鴨高等商業学校教授、東京市現住	
72	堀内　清	1938.4.1		1890.7	京都府出身、同志社普通学校、東京歯科医専及イリノイ大学卒業、前同志社校友会副会長、現在歯科医師、京都市現住	
4	上谷　続	1938.4.1	（理事の項に前出）			
73	金子民三郎	1938.4.1		慶応1 (1865).11	東京府出身、同志社神学校卒業、前村井貿易株式会社社員、東京市現住	

27	村田竹治郎	1938.4.1	（理事の項に前出）			
74	丹羽清次郎	1938.4.1		慶応1(1865).9	大阪府出身、同志社英学校卒業、元同志社校長、宮城基督教青年会総務、満鮮基督教青年会部会長ニ歴任、現国際親和会専務幹事、京城府現住	
75	信近高雄	1938.4.1		1914.2	大阪府出身、同志社高等商業学校及同志社大学法学部卒業、現高周波重工業株式会社々員、目下入営中	*
76	田邊哲崖	1938.4.1		1902.2	岡山県出身、同志社大学法学部卒業、元同志社大学法学部助手、現弁護士、京都市現住	
34	塚本純一	1938.4.1	（監事の項に前出）			
29	若松兎三郎	1938.4.1	（理事の項に前出）			
77	水崎志げ	1938.4.1		1885.12	岐阜県出身、同志社女学校普通部及専門部英文科卒業、元同志社財団理事並同志社大学長故水崎基一妻、横浜市現在	
78	中目タキ	1938.4.1		明治4(1871).1	福岡県出身、同志社女学校普通科及専門部師範科、英国スタッドレーカレッヂ園芸科卒業、元同志社女子専門学校講師、陸軍々医少将故中目成一妻、京都市現住	
79	坂本鶴子	1938.4.1		明治2(1869).12	京都府出身、同志社女学校旧課卒業、元岡山女子職業学校長、現在岡山博愛会理事並ニ岡山市婦人読書会長、岡山市現住	
80	青木庄蔵	1938.7.30		文久3(1863).11	京都府出身、京都禁酒会ヲ興シ、日本国民禁酒同盟ヲ設立ス、鑑菊御会ニ御召、光栄ニ浴ス、現大阪及天満職業紹介所各理事長、青木匡済団理事長、大阪市現住	
81	下村正太郎	1938.8.1		1883.7	京都府出身、早稲田大学卒業、大丸総本家、現株式会社大丸社長、京都市現住	*
20	吉田悦蔵	1938.7.28	（理事の項に前出）			
82	赤堀郁太郎	1938.7.29		1887.5	静岡県出身、同志社大学卒業、大阪府嘱託、石川県社会課長中央融和事業協会常務理事ニ歴任、現神戸市社会課長、神戸市現住	
83	明田重義	1939.1.25		1889.8	京都府出身、同志社普通学校及同志社専門学校経済科卒業、現伸銅共販株式会社常務取締役、大阪金属工業株式会社取締役、豊中市現住	*

84	青山米迦	1938.8.3		1888.3	愛知県出身、同志社専門学校卒業、日本銀行、藤本合名会社ヲ経テ野村銀行ニ入社、現野村銀行名古屋支店長、名古屋市現住	*
85	林　龍太郎	1938.10.1		1904.6	兵庫県出身、同志社大学法学部卒業、山口保善株式会社、哈爾賓不動産信託会社各取締役、現三井銀行神戸支店在勤、神戸市現住	*
86	牧　善之助	1938.8.2		1892.5	京都府出身、同志社普通学校及同志社大学政治科卒業、元松昌洋行ニ勤務、現書籍商カタカナヤ経営、京都市現住	
26	松島寛三郎	1938.8.1	（理事の項に前出）			
87	桜井彌一郎	1938.8.4		1903.2	京都府出身、同志社大学法学部卒業、現三井銀行京都支店在勤、京都市現住	*
88	末広幸次郎	1938.8.1		1891.5	大阪府出身、同志社専門学校卒業、日本興業銀行参事、国際汽船株式会社支配人、沖縄製糖株式会社々長ニ歴任、現日本曹達株式会社常務取締役、東京市現住	*
89	鈴木吉満	1938.7.31		1881.7	滋賀県出身、同志社尋常中学校卒業後渡米、コロンビア大学、ウキリアムス・カレッヂニ学ビ、ユニオン神学校卒業、元同志社中学長、現神戸女学院理事、現関西学院学生主事兼高等商業学校教授、兵庫県現住	

＊昭和 11 ～ 14 年度『事業報告書』により作成。便宜上、通し番号を付した。『同志社理事会記録　摘録』により情報を補ったが、辞任年月日の確定など、未処理の項目を含む。西暦下２ケタを記した欄は、当該年度末には辞任していたことのみ確認されることを示す。明らかな誤字は修正した。〔　〕は後に加わった項目、〈　〉は後に消えた項目を表す。